鑑賞

日本の近代文学は一九六〇年代以降に「文学史」として一定の見取り図の下にまとめられていく。もちろん本間久雄をはじめとする戦前からの研究の蓄積があったわけだが、昭和三十八（一九六三）年に筑摩書房から刊行された三冊の文学史（中村光夫『明治文学史』、臼井吉見『大正文学史』、平野謙『昭和文学史』）は、日本近代文学史を象徴するものと言えよう。そこであらためてまとめられた「文学史」は、教材内で筆者が言う「僕が聞いてきた評判」の一部にほかならない。しかし、実際に多くの小説を読んでみると、筆者の眼にはその「評判」とは「えらく違ったもの」に映ったという。なぜだろうか。

「文学」に関する「歴史」、「文学史」とは、「過去」に発表された偉大な作品をありのままに列記したものではない。イタリアの歴史学者ベネデット・クローチェは『思考としての歴史と行動としての歴史』（一九三八）で次のように述べている。

あらゆる歴史的判断の根底に存在する実践的欲求は、あらゆる歴史に「現代史」としての性格を与える。というのも、そこに含まれている諸事実がたとえ年代的にどれほど古く見えようとも、それはつねに現在の欲求と状況と似関わっている歴史なのであり、それらの諸事実がその鼓動を伝えるのは現在の状況のなかにおいてであるからである。

クローチェの指摘は、一九世紀末までの〈事実〉を集めてきて実証主義に基づいて精査すれば自然と歴史が出来上がるといった従来の楽観的な歴史観を大きく揺るがすものだった。E・H・カーは、「もともと、歴史というものは現在の眼を通して、現在の問題に照らして過去を見るところに成り立つ」とし、「過去は、現在の光に照らして初めて私たちに理解出来るものでありますし、過去の光に照らして初めて私たちは現在をよく理解することが出来るものであります」と、クローチェの見解を発展させた歴史観を提示した。

つまり、「歴史」も「文学史」もけっして「鑑賞のために壁に掛けられた絵」ではなく、それを作る「現在」の状況、作り手や社会の関心の所在や価値観、解釈によって事後的に再構成された「現代史」としての性質を必然的に有しているということになる。

筆者は本教材の出典「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店　平成二十一）の「七日目　文学史の『晩年』から次の千年の文学へ」のなかで、エドワード・サイードの言葉をひいて次のように述べている。

おそらく、その社会全体が「始まり」の意識の中にあるときは、「始まり」にふさわしい物語が求められるのです。そして、社会全体が、成長し、強大になり、壮年の状態になったときにもまた、それにふさわしい物語が求められるはずです。

以上のような「歴史」の認識を踏まえれば、「過去」の「小説たちが、僕が聞いてきた『評判』とは、えらく違っ」ているという筆者の言葉をイメージすることができるのではないだろうか。

また、筆者はかつての自分の「歴史」観を形成した土台に「学校で受けた歴史教育」があったと述べている。この点についても触れておきたい。喜安朗・成田龍一・岩崎稔は「立ちすくむ歴史

―E・H・カー『歴史とは何か』から50年」（せりか書房　平成二十四）の「第三部」で、平成七（一九九五）年以前の「歴史」の教科書は、学習指導要領に基づいて、決められたページ数のなかで、受験に役立つ事件と年代と人名を並べただけの似たり寄ったりのものであり、教科書に掲載された出来事はすべて「国民的必須事項」として無条件に信じられてきたと述べている。それが平成七（一九九五）年の「あたらしい歴史教科書」の登場を受けて、「歴史」というのは〈事実〉そのものではなく「物語」としての一面を有しているという認識をあらためて突き付けられたと論じている。

「歴史」や「文学史」が、それらをつむぐ基点となる「現在」に応じて変化が生じる流動的な枠組みであるという認識は、「陳列されたガラスの棚」としての「歴史」「文学史」のとらえ方を転換させる力を持つだろう。何より、「歴史」を作る工程こそ「現在」を映し出す鏡のような役割を果たすのであり、そこに浮かび上がる「現在」には、筆者や本教材を読む生徒一人一人も当事者として含みこまれる。以上のような「歴史」観を踏まえながら、生徒個々人が「自分の文学史」を作る活動へと展開していきたい。